

アーレント 『活動的生』

第三章

上村 泰裕 (名古屋大学)

第三章 労働

11 「肉体の労働と、手の仕事」

- 近代には活動が優位になり、労働が賛美されるようになった。p103
- 労働は制作だと言いたくなるが、じつは余剰の搾取。p104
- 分業によって労働力だけが必要とされるようになった。p106
- たんなる思考は労働。思想とするには職人的な制作技能が必要。p107
- 制作しない知識人階級は、官僚機構を維持する知的奴隷に近い。p109

第三章 労働

12 世界の物的性格

- マルクスは、生産された物の世界的特性を無視している。p111
- 使い慣れた物に囲まれて、世界は私たちに親しいものになる。p112
- 行為・言論・思考は、物化することで世界に定着する。p113
- 生き生きした精神は死んだ文字に取って代わられる。p114
- 人間の生は世界形成的であるかぎり物化プロセスに参加する。p114

第三章 労働

13 労働と生命

- 消費財の生成消滅は円環運動。個々人の誕生と死は直線運動。p115
- 生物学的生命と区別される個々人の生は伝記として物化されうる。p116
- 労働は無限の円環運動であり、人間と自然の物質交替である。p117
- 労働と消費は貪り尽くす過程であり、材料は破壊される。p118
- 世界の存続を自然の侵攻から守るためにも労働が必要とされる。p119

第三章 労働

14 労働のいわゆる「生産性」と似て非なる、労働の多産性

- 近代の社会理論は、労働こそが生産性と人間性の代表と考えた。p120
- 労働に世界形成的な能力を求めるのは、制作と同一視した結果。p120
- 労働の産物が安定性を獲得するのは、交換と貨幣への転化による。P121
- 経済発展を有機体モデルで捉えようとして、労働価値説に至った。p124
- 人間にとっての活動は労働で代表され、成果は消費された。p128

第三章 労働

15 「生ける」 我有化の促進のための、「死せる」 財産の廃止

- 所有権論は、何にも邪魔されず利得に励む権利を得ようとした。p130
- 共通世界の代表格である一切の制度慣習が攻撃目標となった。p130
- ロックによれば、苦痛＝労働が産む成果は私有されるべきである。p133
- 蓄積プロセスは社会的生産力となることで、無限の成長を始める。p136
- 解放された労働者は、世界と無関係な私的趣味に時間を費やす。p139

第三章 労働

16 仕事道具と労働分割

- 世界のリアリティが見失われ、生命の現実味が優勢となる。p142
- 労働が容易となり、人間は必然に屈していることに無自覚になる。p144
- 仕事道具を労働機具として用いても決まった通りに利用されるだけ。p146
- 分業は特定技能を必要とせず、無尽蔵な労働力を活用できる。p146
- 消費能力向上のために、使用対象物は消費財として扱われる。p148

第三章 労働

17 消費者社会

- 労働-消費社会では、人間の全活動が労働へと押し下げられた。p152
- 労働の自由解放は、労働以外の活動の趣味扱いをもたらした。p152
- 労働の平等解放は、万人の必然への隷属をもたらす。p154
- 余暇が増大しても、消費の拡大が世界の持続性を破壊するのみ。p156
- 大衆文化とは、空ろな時間をつぶすための文化の誤用である。p159